

Title	エントホルト、ホイチン共著 ブレエメンの東北欧貿易史 : Hermann Entholt und Ludwig Beutin, Bremen und Nordeuropa. Weimar. 1937.
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.2 (1940. 2) ,p.317(173)- 322(178)
JaLC DOI	10.14991/001.19400201-0167
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400201-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

H・バイアス「獨逸—一九一四年と一九三九年」M・B・スレンジャー「ナチの必要物資と露西亜の資源」一七二 (三一六)

的を果して居ると思ふ。蓋し教養を受けた人間すなはち文明社會の成員は總てこれ理性的創造物である。これを説服するには理論を用ひなければならぬ。尠くとも言ふところは理論の外観をもたなければならぬ。前記兩冊子は理論をもつて居る。その觀察は一方的であるが、それは著者の不聰明を表はすものでない。彼はその立場からも言つて居るのである。またその取扱ふところは、現に燃えつゝある問題である。讀者關心を把らへ、その知的満足を堪能させるところが頗る多い。今次歐洲戦争に於いて各國政府がプロパガンダの政治的效果を重視し、開戦早々活潑な宣傳戦を開始して居ることは、前に述べた通りである。開戦後ハノーヴァ地方から伯林に旅行したアメリカの雑誌記者O・G・ヰイルラアドは近着の「ニュース・テイツマン・アンド・ネーション」にこの地方に於ける英國宣傳冊子の氾濫を物語る消息を寄せて居る。所謂英吉利の「文書による」攻撃が既に初まつて居るのかも知れない。(German and English propaganda, by Oswald Garrison Villard. "The New Statesman and Nation, Dec. 9, 1939. p. 812.) 私は世界の遙か彼方に重疊する戦亂の餘波が現實にわが國にも打寄せつゝある事實に興味をもち、一例として本文の筆を執つた次第である。

エントホルト、ポイチン共著

「ブレエメンの東北歐貿易史」

—Hermann Entholt und Ludwig Beutin,

Bremen und Norddeuropa. Weimar. 1937.—

高村象平

エントホルト教授は獨逸ハンザ史協會の首腦者の一人である。ポイチン氏はハンザ史研究者として夙に名がある。かくいへば、ここに紹介しようとする兩氏の著はす「ブレエメンと北歐」なる書が、ハンザ都市としてのブレエメンについての文献であること、延いては獨逸ハンザ史研究に役立つ文献であることが、直ちに推察されやう。然しながら、本書の取扱ふ範圍は、獨逸ハンザが北歐商業圏において雄飛した中世後半期にのみ止まるものではない。現在獨逸都市の中にあつて、「ハンザ都市」の稱呼を冠するものは四、リュベック・ハンブルク・ブレエメン・ケルンこれである。このうち、ケルンは數年前ナチス政府によつてハンザ都市と呼ばれることになつたのであり、それまでは、その名稱の母胎獨逸ハンザが勢力を失墜した後、ハンザ都市といへば前記三市を指したこと周知の如くである。ところで、リュベックとハンブルクについては、從來多くの資料集たり研究文献なりが公けにされてゐるが、

エントホルト、ポイチン共著「ブレエメンの東北歐貿易史」

一七三 (三一七)

ブレメンのそれは、數において比較的、尠い状態にあつた。その理由は色々と擧げ得るであらうが、それを尋ねることはここに措き、前記兩氏はこの缺を補ふために、ブレメン文書館に傳來する貿易史資料を編纂し、これに解説を附して公刊されることになつた。この第一書が表記のものである。しかもこの場合編者は、その編纂の重點を十六―十八世紀の貿易關係に置いてゐる。これは資料の残存状態によつて決定されたところでもあらうが、しかしこの編纂方針は、謂ゆる中世的存在たる獨逸ハンザの重要な一環としてのブレメンが、その姿態を近世的要求の前に變容して、以て新時代の重要商港として確乎たる地歩を占めた過程を明かにする上に、極めて適切なものであつたといはねばならない。のみならず、この推移の箇所こそが、從來の研究において最大の間隙となつてゐたところであり、それだけにブレメン乃至末期獨逸ハンザ貿易史の検討上最も困難な場所たるものであつたから、この時代についての資料が公刊されることは、ひとりブレメンといふ一都市の研究者にとつてのみでなく、獨逸ハンザ史研究者にとつても、益するところ甚だ多い所以なのである。

エントホルト教授が、本書の序文において述べられてゐるところによれば、*Quellen und Forschungen zur bremischen Handelsgeschichte* と題するこの叢書は、第二集としてブレメンの西歐・南歐貿易史料を、第三集として海運史料を、第四集として十九世紀貿易史料を採集する由である。このうち第二集は *Bremen und Niederlande. Weimar. 1939.* と題して既に公刊されたと聞いてゐるが、現下の時局情勢から未だ私はこれ入手するを得ない。第三・四集の刊行は、恐らくここ數年内のことであらう。

扱て本書は、上記せる如く、ブレメン市文書館所蔵の資料を諸項目に分つて印刷に附したものである。従つてその内容を一々ここに紹介することは、紙幅の關係から到底許されないが、どういふ風に編別されてをり、どんな資料が收載されてゐるかについて一言しよう。先づ編別としては、(一)ベルゲン航行者組合、(二)アイスランド航行 (三)シエットランド航行、(四)ズンド海峡通航税、(五)露西亞貿易關係資料に分たれてゐる。そして夫々の項目に收められたものは、(一)にあつては、組合規約(一五五〇年)、シタヴァンガ航行禁止命令(一六〇一年)、ベルゲン商館にあるブレメン商人の貸借明細書(一六一五年)、商館とベルゲン市との紛争に關するクリスチャン四世の布告(一六四一年、四二年)、組合に屬せざる商人の魚類取扱禁止令(一六五〇年)、クリスチャン五世の特許狀(一六七〇年)、貿易状態報告書(一七一七年)、商館衰退原因調査(一七五〇年)等であり、(二)には、ハムブルク商人の妨害に對する抗議(一五六四年)、フリードリッヒ二世のブレメン商人優遇要求否認文書(一五六六年)、アイスランド貿易障害の訴狀議(一五六四年)、クリスチャン四世のアイスランド航行禁止令(一六〇一年)等が、(三)にはブレメン商人との紛争(一五八六年)、クリスチャン四世のアイスランド航行禁止令(一六〇一年)等が、(四)にはアイスランドの紛争(一六七一年)等が、(五)には、ズンド通航税輕減要求書(一六四二年)、これに對するクリスチャン四世の否認(同年)、通航税引上中止布告(一六四三年)、通航税廢止に關する報告書(一八五五年)、一八四二―四七年及一八五一―五三年にエレンズンドにおいて徴せられた關稅額、一八五三年ズンドを通航せるブレメン積出商品及びブレメン向け商品の明細表、ズンド通航税廢止案(一八五六年)等が、そして最後の(五)には、露西亞貿易促進に關する建言書(一七二八年)、露西亞女王に對する貿易振興請願(一七三九年)、露西亞貿易状態報告書(一七八八年)等が收載されてゐる。

これ等の資料を如何に生かすかは、今後吾々に課されたところであり、いまそれを豫想することは措かねばならない。たゞ本書によつて明かにされる十六―十八世紀ブレメンの東北歐貿易史とは、如何なるものであつたか、これを概観しておくことは、この紹介文において必要とされるところであらう。先づ十六、七世紀ブレメンの諸

威貿易は、ベルゲンに集中された。ブレメン商人のベルゲン航行者組合結成は、恐らくリュベックのそれに倣つたものであらうが、十六世紀には他のウエンデン諸都市を凌駕するやうになつてゐる。それは既にレルク氏の研究によつて示されてゐるところであるが、一五九七—一六〇〇年にベルゲンを訪れた獨逸ハンザ船舶中、リュベック百隻、ロストック百二隻、ブレメン百五十一隻と、ブレメンがその首位を占めてゐることからも推察し得るところである。この現象は、ブレメンの背後地たるウエゼル上流地方の穀物輸出の擴大に負ふところ尠くない。然しながら、十七・十八世紀と時を経るに従つて、この諸威貿易には英蘭・和蘭商人の進出目ざましく、又諸威士着商人の擡頭、クリスチャン四世の排外(特に獨逸商人に對する)政策も加へられて、ここにベルゲン商館と共に、ブレメンの貿易も衰退するに至つた。

このベルゲン貿易から派生したのがアイスランド貿易である。十六世紀にはこの貿易を繞つて、ブレメン商人とハンブルク商人の競争が展開される。アイスランドにおいても、ハンザ商人の仕入制が行はれたのであるが、たゞこの島は丁抹國王の直領地であつた爲め、少くとも島民の日常必需品の價格は王の代官によつて指定され、この意味で仕込制はハンザ商人の專斷に委ねられることはなかつたといふ相違がある。ここにおいても十七世紀初頭には、クリスチャン四世によつて獨逸商人参加禁止令が發せられ、やがて彼等の渡航は杜絶せざるを得なくなつてゐる。次にシェットランド諸島との關係をみると、前記の兩貿易と同じく漁撈權は島民の留保するところであつたが、たゞここではブレメン商人は自ら魚類を加工せねばならなかつた。そして十八世紀英・蘭兩國民のこの地への進出と共に、ブレメン商人はこれを去つて蘇蘭貿易にその方向を轉じたのであつた。

扱て前記ベルゲン貿易の頽勢を補ふものとして、十七世紀中葉以降、ブレメン商人はスピッツベルゲン附近で捕鯨を開始してゐる。この謂ゆるグリーンランド航行において興味ある問題は、捕鯨船舶共有組合を以てする危険分散と、エルベ・ウエゼル兩河下流地方における捕鯨者の Deichdorf 形成とであらう。この捕鯨については、ブレメンはハンブルクの下位にあつたけれど、尙可成りの成果を贏ち得たのであつた。然るに北海の鯨漁撈については、これを見れば、ブレメンは殆ど無意義に終始した。例へば十九世紀初年、數回に亘つて鯨漁業會社が二萬乃至十萬タアラアの資本を以て設立されてゐるが、いづれも永續せず終つてゐる。これは隣國和蘭の鯨漁業によつて壓倒されたからであり、これに對抗する如き國內統一が獨逸には無かつたからである。然しながらブレメン商人は鯨取引には非常に活動し、十六世紀以降は和蘭漁業生産物を、十八世紀には英蘭・蘇蘭の漁獲物を、大陸内部に仲繼する第一人者となつてゐた。

東歐貿易に眼を轉ずるならば、先づ以てズンド通航に對する丁抹關稅政策の推移がブレメンの貿易に及ぼした影響を探り上げねばならない。然しこれに關說することは措いて本書七二—一〇五頁に亘つて掲げられた統計表を顧みよう。これは一八五三年にズンド海峽を通航したブレメン—バルト海奥地間の船舶積荷と、それに課せられた關稅額との記録であるが、これによつて、十九世紀のブレメンが新世界市場と極めて密接な意義を持つたことが明かにされる。即ち、この海峽を通過せる商品の首位を占めたものは、煙草・米・砂糖・木綿・熱帯建築用材等であつた。これは、既に公けにされてゐる十六・七世紀のズンド通航稅記録によつて、この頃のブレメンの對バルト海貿易が受動貿易であつたことと、正に對蹠的な動向であるといはねばならない。ところで、右の諸商品の可成りの部分は、露西亞に送られたのであつた。それは獨逸沿岸諸地方の經濟的意義喪失の結果、十八世紀中葉以降露西亞貿易がバルト海航行の重點を形成するに至つたことに基く。そしてこれからして、舊ハンザ都市ブレメンが、

アメリカその他の新植民地とバルト海市場特に露西亞との仲繼貿易なる新しい分野に進出し、以て近世における重要世界的商港に一轉したことが示されるのである。しかもこの轉換は、ブレメン自體より見れば、大約十八世紀末の頃、北歐貿易から西歐——その植民地貿易に、その重心を移したことに由來するのであり、ここにブレメンの經濟的新時代は開始されることになつたのであつた。

大略上述の如き意義を持つ本書は、従つて第二集に豫定されてゐる對西歐貿易史と併讀考量して、以てはじめて完きものとなると思はれる。然しその他方において、本書のみを以てしても、中世末期より近世への轉換期に、獨逸海港都市が經ねばならなかつた貿易乃至その政策上の諸問題の一端を味讀することは出來よう。これ、本書がブレメンなる一都市の貿易史料であるにも拘らず、ここにその持つ意義を顧みて本誌に紹介する所以である。

前號(第三十四卷)目次

- 前世紀後半の高賃銀論 藤林 敬三
- 中世獨逸の建設都市と商人仲間 高村 象平
——特に「ヨスラール」について——
- 租稅經濟の理念 永田 清
- 經濟名著解題 高 誠一郎
一千八百八十三年版「ソリ・シゴウィック」著「經濟原論」
- A. J. P. Taylor, Germany's First Bid for Colonies. 1884-1885 (A Move in Bismarck's European Policy). 1938. 山本 登
- James J. Gillespie: The Principles of Rational Industrial Management. London 1938. 小高 泰雄
- 羽原又吉著「アイヌ社會經濟史」 高村 象平
- 宮本又次氏著「近世商業組織の研究」 伊東彌之助

●一冊定價金五拾錢
●半年分金貳圓九拾錢
●一年分金五圓四拾錢

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛

●營業に關する用件は發賣元宛

●原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和十五年一月廿五日印刷納本 每月一回一日發行
昭和十五年二月一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
編輯兼發行者 江田 範 保
東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内
印刷者 金子 鐵 五 郎
東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷所 金子 活 版 所

發賣元 丸善株式會社三田出張所
東京市芝區三田二丁目一番地

電話三田(45) 二九二六番
一八九二七番
振替口座東京 二八五三番

●尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所 慶應義塾内 理財學會

振替 慶應義塾 塾 芝區三田二丁目二番地 東京一八二〇四番